

近世

第10章 幕藩体制の動揺 3. 幕府の衰退と近代への道 (2) 鎖国の動揺

鳥取にもたらされた珍品

おらんだわた らくだ
—阿蘭陀渡りの駱駝の事—



「阿蘭陀渡りの駱駝の図」『因府歴年大雑集』第15巻 鳥取県立博物館蔵★

解説

まつだいらさだのぶ まつだいらさだのぶ かんせい
松平定信が進める寛政の改革の大きな課題の1つとして、外国からの危機への対応があった。1792(寛政4)年、ロシア使節ラクスマンが根室に來航し、大黒屋光太夫を届けるとともに通商を求めてきた。それを機にロシアをはじめ、イギリス、オランダそしてアメリカも幕府に通商を求めてくるようになった。この資料には、1824(文政4)年にオランダから長崎にもたらされた2匹の駱駝(ラクダ)の様子が記されている。外国船が日本に近づき、緊張状態が続いている時期でありながら、そのあおりを受けてやってきたラクダの生態・容姿とともに、当時の人々が「靈獣」としてあがめている様子や興味・関心を抱いている様子を見ることができる。



「阿蘭陀本国軍船略図」
『因府歴年大雑集』第13巻 鳥取県立博物館蔵★

(担当：花原慧史)

【釈文】
〔此一図を画て家の内に張おけハ、疫病、ほうそう、はしか、悪事、さい難、まぬかれ、一度見る時ハ不老長生うたがひなきこと、寄代の靈獣也、文政四巳六月秋、紅毛人長崎へ持渡ル、夫より暫く大坂において諸君子入見覽に、諸国に其評判あまねく響、依之、此度江戸両国ニおみて、諸人入尊覽、耳目驚し、未だ談話の其一ツとする事しかり。〕

※「一」部分は上図では省略

【意訳】
前略…この絵を家の中に貼っておけば、疫病、疱瘡、はしか、悪事などの災難から免れ、一度見れば不老長寿になれる世にまれな靈獣である。文政四年六月にオランダ人が長崎に連れてきた。その後大坂に行き、評判が高まり江戸まで行くこととなった。…後略

参考資料

・鳥取県『新鳥取県史資料編 近世6 因府歴年大雑集』609頁(2019年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。